聖ヶ丘

第 47 号
2025･6･8 発行
金光教
教学研究所

きっと迷いの中に倫理がある

第一部部長　白石淳平

嘉永七(安政元／一八五四)年一一月五日、紀伊水道から四国沖を震源として発生した「安政南海地震」により、数千人が犠牲となった。前日に起きた「安政東海地震」と共に、マグニチュード八級の南海トラフ巨大地震とされ、高知県には津波が二〇メートルを超えたとの記録も残る。

同日の様子については金光大神も、「ばんの七つ頃に大地震入り。その後二日三日も入り」(「年譜帳」六八丁表)と記しているが、最近、当時の宇和海沿岸における被害と復興への足取りを詳しく伝える文書が話題となった(令和七年三月二五日付『毎日新聞』地方版記事参照)。

それが、愛媛県歴史文化博物館(西予市)が東京の古書店で発見・収集したという「此度大地震大汐ニ付訴書并諸願書　一巻」である。同県最南端に近い外海浦(現南宇和郡愛南町沿岸部)の庄屋二宮家が残した文書だという。

同館学芸員の解読・分析によると、とりわけ、久家浦(現愛南町久家)の被害は甚大であったとされる。というのも、地震発生から約一月後、慣れない仮小屋暮らしから出た火が強風で二町四方に燃え広がり、住居二一軒、納屋二五軒のほか、重要な生活手段であった漁船二隻と網蔵まで焼けてしまったからだ。米蔵が浸水し、収穫後の年貢米が損なわれたなかでの出来事は、津波と大火の二重災害の様相を、痛々しく伝えるものとなっている。

このほか、同文書には、蘭学者高野長英の設計で宇和島藩が同地に築いた砲台の火薬蔵が被災したことなど、興味深い記事もあるそうだが、私が何より注目したいのは、解読した学芸員が、「復興に向けた先人の願いと動きが伝わってくる」と語るように、年貢の減免や銀納による長期の年賦を代官所へ訴える庄屋の粘り強い交渉を、こうした記録で知ることができる、という事実である。

そもそも庄屋が記録を残そうとしなければ、その事実自体知る由もないだろう。さらには、文書が保存され、研究活用されなければ、歴史的知見として我々の今に届けられることもなかったはずである。

その意味で、残された記録は、災厄に見舞われた数多の霊の声なき声をも、同時に読み取らせるものとなっているのである。まさに、「アーカイブズ(文書・記録／保存・管理)」の力と、その重要性を、強く思わされる。

＊

ところで、「アーカイブズ(archives)」の語源は、

「アーク(Arc)＝櫃(ひつ)」「アルキウム(Archivum)＝公文書」といったラテン語や、「アルケー(arkhe)＝始まり」に由来し「記録」を意味するギリシャ語「アルケイオーン(arkheion)」に遡るとされ、さらには「箱船」の英語「アーク(ark)」との関連性も示唆される。

このように「アーカイブズ」は、その言葉自体、人類の歴史、その意味で必然的に信仰との関係を孕んでいるとも言える。これに関わって、近年、科学的「知」の探究・継承と信仰とのせめぎ合いをテーマとした漫画『チ。―地球の運動について―』が話題となったことが思い返される。

ＮＨＫでアニメ化もされた同作では、一五世紀ヨーロッパを舞台に、禁じられた地動説を命がけで探求し継承した人々の生き様と信念が描かれる。興味深いのは、一人の主人公ではなく、世代の異なる多彩な人物それぞれの視点で物語が進行する点だ。救われ難い現実を前に旧来の信仰や世界観が揺らぐ時代にあって、地動説に希望を見出した個性豊かな登場人物たちが彩る同作のあらすじを、とりわけ印象深い幾つかの台詞から紹介してみたい。

代闘士という低い身分にありながら天文に惹かれ続けたオグジーは、後世に地動説を託すべくラフアウが隠した手紙を発見し、「今ここにいない人の思いを無視したら、何かが決定的に失われる気がして。歴史というか…」と逡巡する。対して、修道士で研究者のバデーニは、「聖書以外の歴史など、私は気にしない」と返すのだが、後に、地動説の世界に出会った感動を言葉にしたオグジーの感性に魅せられ、未来へと「知」を届ける文書の可能性に命を懸けることとなる。

そして、異端審問官を父に持ちつつも彼ら二人と行動を共にした女性研究者ヨレンタは言う。「荒れ狂う自然や理性のない獣、罪深い人間。そういった悲劇のたぐいのものたちですら、なぜか全て美しさを備えてる。これには何か理由があっていい。それが、地球の運動なのかもしれない」。

そんな彼女は後に、「人は、先人の発見を引き継ぐ。それもいつの間にか、勝手に。自然に。だから今を生きる人には過去の全てが含まれてる」「全歴史が私の背中を押す」との決意から、地動説を支持する組織を率いて命を落とすのだが、人の信念が時に災いを招くことを認めつつ、「迷って。きっと迷いの中に倫理がある」と、自らの亡き後を次の世代に託す。

そうして、未来への「知」の伝承を託された無神論者ドゥラカは、ヨレンタという人間との出合いに心打たれ、「きっと社会から神が消えても、人の魂から神は消せない」との思いに至るのであった。

しかし実は、彼女ら含めここまで登場した者達は、いわゆる「歴史」には登場しない人物として描かれている。作中で唯一の歴史上の人物として、最後に登場するアルベルトは、「信」と「知」の狭間で苦しむ青年であった。彼は、司祭との問答を通じ、「僕等は足りない、だから補い合える。そうじゃなきゃ、この世界には挑めない。人間は社会的な動物だ」と気付き、「タウマゼイン(驚異)」へ向かって、「疑いながら進んで、信じながら戻って」、やがて歴史にその名が刻まれることとなるのである。

こうした、世代を超えて「問い」が抱えられるありように、私は、教学研究の営みを重ね見る思いがする。しかし、だからこそ忘れてはならないのは、そこでの「問い」には常に、不安や逡巡、迷いが伴っていたのであり、そしてそれは、帳面への記録に迫られ続けた金光大神も同様であったろうということだ。

戦後八〇年の現代社会を生きる我々として、改めて、歴史的事実やその記録への向き合いにおける「倫理」の問題を、心に掛けておきたいと思う。

＊

さて、霊地各機関合同での「第一回教団の文書管理に関する懇談会」の主催を皮切りに、本所は本年度より、教団の「アーカイブズ(文書管理体制)」構築へ向けた新たな一歩を踏み出した。

今後、本所も関係各機関も、様々な困難に出合い、時には迷いや不安が生じてくることもあるだろう。しかし、その迷いにこそ、歴史に真摯に向き合う倫理があるとの思いに立ち、たとえ踏み出しはたどたどしくとも、後世へと信心の「知」を届けるための努力を、一歩一歩、誠実に進めていきたい。

知っていたはずの世界がまるで違って見えるような、そんな信心との出合いが、未来に生まれていくことを願って。

（愛媛・南宇和教会）

◇令和七年度の計画◇

本年度は、所長以下総勢一二名でのスタートとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

紀要論文講読セミナー

【場所】金光北ウイング光風館研修室

【日時】各回 一三：〇〇～一五：〇〇

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れられる方も意識した取り組みです。

本年度は、下記の予定で四回開講いたします。参加希望の場合は事前にご連絡下さい。

なお、開講日・内容などが変更となった場合には、金光新聞や金光教本部フェイスブック、教学研究所ホームページなどを通じて随時ご案内いたします。

〈実施済み〉

第一回 五月一〇日(土) **担当・濵田裕太郎**

岡成敏正「「覚帳」に見られる親子関係についての一考察―金光大神とその長男浅吉の生活史を中心として―」（第三一号）

〈予定〉

第二回 七月一〇日(木) **担当・服部貴子（研究員）**

早川貴子「金光大神広前における「藩士」の動静―「広前歳書帳」を手がかりに―」（第五一号）

第三回 九月一〇日(水) **担当・森定展開**

渡辺順一「日本植民地統治下での東アジア布教―台湾・朝鮮・満州での布教の軌跡とその問題―」（第三二号）

第四回 一一月一五日(土)

※教学に関する交流集会と兼ねて開催予定

第一回教団の文書管理に関する懇談会

【場所】本部総合庁舎会議室

【日時】六月二日(月)九：〇〇～一二：〇〇

「これからの教団の文書管理のあり方をめぐって」をテーマに、本部教庁並びに各機関のご協力を得て開催しました。本懇談会では、教団における文書管理の現状と課題を共有するとともに、本所資料管理の経験に基づく今後の展望を提示し、各機関の皆様と意見交換を行いました。

第六四回教学研究会〈予定〉

【場所】金光北ウイングやつなみホール

【日時】六月二〇日(金)

本年も来場参加とオンライン参加を併用する形で開催します。内容は、通常の個別発表に加え、「それぞれの戦後八〇年―今を捉え直すために―」をテーマとする全体会を企画しており、午前は個別発表、午後は全体会（発題：中里巧氏、高橋昌之、山田光徳）を予定しています。

第二六回教学講演会〈予定〉

紀要第六五号の研究成果を題材にした教学講演会を予定しています。場所・日時等、詳細が決まり次第、改めてご案内いたします。

第二九回教学に関する交流集会〈予定〉

【場所】金光北ウイング光風館研修室

【日時】一一月一五日(土)

信奉者との討議や意見交換を通じた、相互の問題関心の醸成を願っての取り組みです。本年度は紀要論文講読セミナー第四回と兼ねて実施する予定です。詳細が決まり次第、改めてご案内いたします。

〇

この他、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図ってまいります。

また、例年、広く現代の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図るべく、一般諸学問や他の教宗派との研究交流を行っています。

これらの取り組みを通じて、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培ってまいりたいと存じます。

◇令和七年度研究題目◇

〈第一部　教祖に関する研究〉

・維新期の動乱と信心の創発
　―岡山城下の様相に注目して―　　所員　白石淳平

・神職身分の帰趨
　―喪失以降の金光大神「振り返り」へ向けて―　　所員　堀江道広

〈第二部　教義に関する研究〉

・災害の現場と信心
　―東日本大震災を手がかりに―　　所員　高橋昌之

〈第三部　教団史に関する研究〉

・〝教団の戦後〟を介したそれぞれの歴史、その可能性をめぐって
　―聴取調査を通じた同時代史研究の試み―　　所員　山田光徳

・メディア編制に見るダイナミズム
　―昭和五十年代の取り組みを中心に―　　所員　須崎真治

提　言

マドンナへの接近法

研究員　熊谷元喜

研究所の先生方には日々研究ありがとうございます。先生方の研究は、私の「金光教」像や「教祖」像を鮮明にしてくださったり、ときに揺さぶりを与えてくださり信心を進展させるきっかけを与えてくださります。一方の私は研究員という肩書を頂いておきながら、見合った働きが全く出来ておらず、いま罪滅ぼしのようにキーボードを叩いております。そのようなことで教学研究ど真ん中の提言・意見は出来るはずもなく、以下の内容が個人的な願望ないし妄想になることを予めご了承ください。

さて、私にとって教学は言わばクラスのマドンナ、仲良くなりたいけれども少し近づき難い存在です。似た感情を抱く方はきっと私だけではないはずです。さらに研究は、過去の成果を踏まえつつ、次々と積み上げられることを考慮すれば、「教学のマドンナ化」は今後どんどん進行するのではないかと邪推してしまうのです。一部の冒険者を除いて近寄る者がいない高嶺の花となってしまったら大変勿体無いことですから。

私は哲学に対しても似た感情を抱いていたのですが、ある本と出会って向き合い方が変わりつつあります。その本とは数年前に発行部数一〇万部突破、新書大賞受賞と話題になった千葉雅也著『現代思想入門』です。同書は三人の哲学者を取り上げながら現代思想を概観するものですが、個人的には付録として収録された「現代思想の読み方」が大変参考になりました。難解な哲学書を読むに際しては、二項対立を意識するとか、原文の構造を英語だと思って推測してみるとか、非常に具体的なアドバイスがなされていたからです。また、その「読み方」は少し開き直ってもいて、通読しなくてもよいとか固有名詞は無視する等のアドバイスもありました。これらは研究者の読み方としては不十分かも知れません。しかし、初学者としては哲学書へのハードルが下がり、読んでみようという気になります。研究所ではすでに紀要論文に触れる機会を多く設けられていますが、さらに『教学研究の読み方』なるものがあれば、私のような人間には論文を読む心強い相棒になります。そして読者の裾野が広がれば教学全体が賑やかになるのではないかと思うのです。

また、積み上げられていく研究成果の活用に関しては人工知能の利用可能性を夢想します。最近ではGoogle が提供するNotebookLM 等、各ユーザが指定した文献をもとに情報を整理、提供してくれるサービスもあるようです。一般的な生成AIはインターネット上の広汎な情報をもとに回答を生成するため、情報源が不明であったり、情報が誤用される懸念があります。しかし、参照する資料を金光教内の文書や音声等に限定すれば、教内用語を誤用することなく、AIに出典を明示させることもできます。無論、教学研究においては各研究者の信心が重要な要素なので人工知能が研究を肩代わりすることはできません。しかし、有効活用ができれば研究が飛躍的に進展するかも知れませんし、そのデータベースが利用できるとなればこれまでマドンナへのアプローチに二の足を踏んでいた人たちさえも研究者になってしまうのではないか等と夢想するのです。

特集　令和六年度研修旅行を振り返って

教学研究所の　京都研修旅行にご一緒して

元京都大学人文科学研究所長　高木博志

私は二〇一五年から、教学研究所にお世話になってきました。都市の周縁にある花街・遊廓における金光教布教の調査・研究のために、故渡辺順一先生から兒山真生先生を紹介いただいたのが最初の縁です。

教祖・教義・教団史としっかりと研究方法に定め、一九五八年から高い水準の研究雑誌『金光教学』を出し続けている教学研究所に、私は敬意をもっております。共同研究ということで、私の本務とも通じます。いつも調査では、職員の教示のみならず、心あたたまる交流や宴をもっていただいています。職員の皆さんの教学への真摯な姿勢、誠実な人柄に接すると、正直なところ金光への調査で心洗われる気持ちになります。

今回、京都で研修旅行案内の話をいただいて、やはり京都布教の舞台となった、鴨川東側の都市周縁を歩きたいと思いました。上京・下京という町の中心は既成の仏教が強いため、金光教は周縁において困難な布教を始めました。また私の定年前ということもあり京都大学大学文書館と、京大で最も美しい人文科学研究所北白川分館を選びました。教学研究所には、教団の公文書をどのように保存し活用してゆくか、という課題があります。

大林浩治所長の事前資料も得て、二〇二四年七月三日一三時に一三名の職員と**祇園石段下**に集合。石段上で、今日は**八坂神社**・祇園から七条新地まで、上京・下京の町の周縁、鴨川の東側における性や死や差別を考えると説明。四条通北東側の祇園乙部は売春を強いられた娼妓主体の祇園乙部であり、現在最も華やかな四条通南側の花見小路は明治期に開発された舞妓・芸妓の祇園甲部であると説明しました。**円山公園**は文明開化の場であり、有名なしだれ桜は明治維新で廃寺となった宝寿院の庭桜のみが残ったもの。円山には、明治期に中村楼（現役）をはじめ外国人向けホテルが営業しました。

東山通を西に渡り、現在、「もてなしの文化」の中

心、**祇園甲部歌舞練場**の場所には、明治期に**駆黴院**（いん）（娼妓の梅毒検査や入院のための施設）がありました。明治二〇年代の京都では、花街・遊廓に金光教が深く浸透します。駆黴院に収容された娼妓の信者は、早く性病が治って妓楼に戻りたいと祈念しています（拙稿「金光教と遊廓・花街―都市布教と民衆」『金光教学』五八号、二〇一八年）。さらに南下した**宮川町**は、今は祇園甲部とともに二〇人以上の舞妓がいる「もてなし」の花街です。しかし一九一二年には芸妓二六六人、娼妓二七二人がいたように、一九五七年の売春防止法施行までは売買春も行われました。竹久夢二や芥川龍之介は娼妓を買い、映画関係者は撮影が終わると登楼しました。宮川町の妓楼主や娼妓の悩みが、金光教・開栄組の「祈念帳」に残されています。

宮川町の歌舞練場を下がると、中世の五条通であった松原通に至り、松原橋から東に清水道が続きます。松原通の北側には、中世の晴明塚に起源する荒龍神社が残ります。明治維新まではハンセン氏病患者が居住した物吉（ものよし）村があり、市中に勧進し清水参詣者から喜捨を受けました。松原通を東に行くと六道の辻の手前までが**弓矢町**で、居住する犬神人（つるめ）は中世祇園社の警護や清掃に携わりました。

松原通の**六道の辻**は、この世と来世の境界です。ここから東、そして清水坂から泉涌寺にかけて中世には鳥部野（とべの）の死の世界が広がっていました。六道の辻で幽霊子育て飴を食し、六波羅蜜寺でトイレ休憩。そこから清水焼の工房を南に抜けて、五条通、馬町通から南下し、**豊国神社**に着きます。ここには一八世紀まで、奈良より大きな大仏が聳えていました。江戸幕府は大坂の陣の後、豊国社を破壊し、幕府がその領地を取り上げますが、明治維新はそのリベンジです。江戸幕府を否定して、豊臣秀吉を顕彰する豊国神社が一八八〇年に創建されました。一九二五年、信者で大正期の無声映画の大スター、「目玉のまっちゃん」こと尾上松之助は、豊国神社の階段上を舞台に、野外劇で秀吉を演じます。隣接する**耳塚**の大正期の玉垣には、侠客で興行主の小畑岩次郎を中心として片岡仁左衛門・中村鴈治郎などの寄進者の名が連なります。当時、歌舞伎・浪曲・浄瑠璃などで「太閤記もの」が一番人気の演目で、日韓併合後の「帝国」の時代状況にふさわしかったのです。そして大仏前の甘春堂、近世の名物・大仏餅（復刻）で一休み。

正面橋の北東、「元和キリシタン殉教の地」碑があり、それをこえると世界の**任天堂旧本社**のライト風建築（一九三〇年）が際立ちます。任天堂の立地は、まさに遊廓・七条新地に隣接した賭博・花札とかかわります。この**七条新地**（五条楽園）は、五条大橋から正面通まで南北に続きます。近年、建物が失われつつありますが、昭和戦前期には桃山調遊女のステンドグラスの洋風妓楼や唐破風の和風妓楼が軒を並べ、約千人の娼妓がいた市内最大で最底辺の遊廓でした。当時、映画を二回観る、あるいは上うな丼二杯程度の一円余で、一時間の買春ができる「大衆売春社会」でした。高瀬川沿いの高瀬教会は、遊廓の真ん中にあり、売防法まで妓楼主や娼妓に寄り添ってきた歴史がありました。夜は、京都駅前の酔心へ。

七月四日は、午前中に**京都大学大学文書館**で、西山伸先生の教示をうけました。資料の取捨選択、保存管理や修復についての職員の質問に、丁寧に答えていただきました。それから京大生協で昼食、近世の志賀越の道をへて、京大**人文科学研究所北白川分館**に移動。一九三〇年創建のスパニッシュ・ロマネスク風の白亜の研究所は、京大東洋学の拠点であり、その核心の漢籍の詰まった三層の書庫をみていただきました。吉田山沿いに南下して、**宗忠神社**で、黒住教の中山みや子・祐太先生の案内で、幕末の朝廷布教、吉田神社境内地での創建の歴史を学びました。夕方、岡山へ皆さん、車での帰路となりました。

炎天下の二日間、なかなか明治期の京都布教の痕跡を見つけるのは難しかったかもしれませんが、京都周縁という困難でもあり活気に満ちた場で布教した先人たちに、私も思いをはせました。

八坂神社前に集合

京都研修地図（岡恵子さん作成）

耳塚(京都市東山区)

豊国神社の鐘(京都市東山区)

任天堂旧本社前(京都市下京区)

六道の辻近辺で一休み(京都市東山区)

京都大学人文科学研究所にて

宗忠神社(京都市左京区)にて宮司より説明

令和六年度研修旅行記

―京都大学大学文書館（ぶんしょかん）での学び―

資料室長　毛利義幸

前掲の高木博志先生による詳細な旅行記でも触れられているように、令和六年の本所研修旅行では、高木先生の仲介により、京都大学大学文書館での研修の機会を得ることができた。同館教授西山伸(ノ)先生から施設や文書管理の概要説明があった後、実際に書架を回り資料の保管状況を見学、最後に質疑応答・懇談を行った。本稿では、この度の研修で特に印象に残った点と、そこから得た学びを紹介していきたい。

○

京都大学大学文書館は、「行政機関の保有する情報の公開に関する法律（情報公開法）」の公布（一九九九年）を受け、また『京都大学百年史』編纂のために集められた資料の保管・公開の必要性の高まりを背景に、二〇〇〇年一一月に設置された。本格的な大学文書館としては日本初の組織であるという。その後、「公文書等の管理に関する法律」の施行（二〇一一年四月）に伴い「国立公文書館等」に指定されている。

同館は、大学内での「保存期間が満了となった法人文書」と「大学に関係する個人・団体から寄贈・寄託される資料」の受入、整理、公開を主な業務とする。その他にも、所蔵資料のレファレンス対応、高等教育史・アーカイブズ学等に関する調査・研究及び講義、大学での常設展の運営及び企画展（年二回）の開催、大学内の各部局（学部や研究機関など）における文書管理の監査や職員向け研修など、多岐にわたる業務を行っている。これらの広範囲な業務を、専任教員を中心に、事務職員や大学院生のアルバイトなどが、それぞれの専門性や役割に応じて分担し、効率的な運営を行っている。

○

この度の研修の中で、まず驚いたのは、文書の収受体制のあり方についてであった。

京都大学では、各部局において、法人文書が作成された時点で保存年限が設定される。各文書の性格によってその年限は異なるが、その年限が満了した文書はリスト化され、毎年文書館に提供されるのである。それらは、毎年約一五〇〇〇点に及ぶという。そのリストを得た同館は、文書の内容確認を行った上で、必要と判断された物を最終的に受け入れることとなる。このように、保存年限が予め設定されることで現用文書と非現用文書の類別がなされ、非現

用となったものがほぼ自動的に同館に移管される体制のあり方は、本所内はもとより、機関を越えて教内の文書類を一元的に管理するあり方を構想する上で参考になると思われる。

また、西山先生によると、文書の受け入れに際しては、所蔵庫のキャパシティが常々意識されているという。そのため、資料の受け入れ基準も、その都度見直しながら行われているのである。本所においても、資料環境の整備は積年の課題である。本所では、各機関や教会から受け入れた資料を廃棄することは基本的に考えないが、自らの基準を絶対視せず、様々な実情がある中で試行錯誤を重ね、より良いあり方を常に模索する姿勢には、学ぶべきものがある。それとともに、本所の先人たちも同様にそうした創意工夫を凝らしてきたであろうことが想起され、我々としても、今、どうあるべきか積極的に考えていくことの大切さに思いを新たにすることとなった。

なお西山先生は、こうしたシステムがありつつ、人間が行うことであるから、その徹底などに課題が残る部分は必然的にあるとも述べておられた。しかし、そうだからこそ、文書管理の重要性、必要性を折々に周知し、より良い文書管理の協力体制のあり方を模索しておられるようであり、本所においてもその姿勢に倣いつつ、今後の体制整備を進めていきたい。

この他に、所内の資料管理における実務的な面でも大きな示唆を得た。例えば同館では、受け入れた文書について直接ＰＣで目録データを作成し、内容が調い次第、ＨＰ上の検索システムに反映される。また、そこでの入力内容は、文書の性格に関わる詳細な内容は避け、極力簡易なものにするという。これらは、文書の公開を原則とする同館としての、効率性、即応性に鑑みた手法のようである。

対して、本所の所蔵資料は原則非公開であり、その活用の可能性は、研究利用を通じて開かれる性質のものとなっている。そのため、同様のあり方を目指すというのではないが、例えば、目録の作成方法には学ぶべき点がある。というのも、本所では、資料を受け入れた際には、まず手書きの受入目録を作成する。その上で、その内容をより細分化した目録を作成し、データ化しており、効率性の面で改善の余地があるからだ。こうした従来のあり方の再検討を通じて、漏れ落ちのない管理と必要な情報へ迅速にアクセスできるあり方を、今後さらに充実化させていく必要性を考えさせられることとなった。

所蔵庫では、同規格の書架が立ち並び、文書保存の観点から独自に考案されたという専用の文書保存箱が一律に整然と並んでおり、その相貌は圧巻であった。同規格の箱で収納されることによって傷みにくく、取り出しやすく、戻しやすい。長期保存、利便性といった工夫がここにもあった。実際に文書整理を行っている様子や、一部の文書も見学した。一部の文書には、マスキングが施されていた。同館の文書は公開を前提とするがゆえに、プライバシー保護には細心の注意を払っているという。

○

以上、述べてきたように、この度の研修を通じて、文書を残し、その活用に寄与するという使命に生きる人々の姿と、そのための数々の創意工夫に触れることとなった。規模や内容の違いはあるにせよ、志を近くする我々として、これまでの本所の営みを引き継ぎつつ、本教の先人たちが生きた足跡である資料たちを未来に生かし続けていくために、そしてここからの教学研究に資するべく、本教の資料管理のあり方を求め続けていきたいと、思いを強くした次第である。

西山伸教授より概要説明

京都大学大学文書館入り口

書架を案内してもらう

京都大学大学文書館(同館ＨＰより)

寄稿

戦後八〇年を迎えて

今年、戦後八〇年。研究所では、これにちなんだ取り組みを教学研究会で企画し、また今年の紀要で、高橋哲哉先生が“戦争”に絡めた論文を発表する予定です。

「聖ケ丘」では、特集を組まなかったのですが、慰霊の問題など、今後もふだんの生活の中でじっくり噛みしめていきたいと思い、このたび、沖縄在住の花城郁子さんに寄稿して戴きました。花城さんについては、二〇〇六年「日韓宗教研究FORAM」での沖縄調査(二〇〇六年一二月二一日~二四日)時のトークセッション(「いたみとアートの可能性」)で発表戴きました(「聖ケ丘」第二八号に関連記事)。

寄稿後、こんなコメントを頂きました。

「私のたった一言が、宿題になり、文章になって…、そしてそれが祈りや鎮魂、癒やしになっていくんでしょう。それにしても、日本兵の幽霊は重たいテーマでした。でも、こうして文章化でき、戦没者、祖母たちも救われると思います」

ご自身の祖母の話など、人に話すのもためらわれることを書いてくださり、ありがとうございました。(これからも、ちょくちょく依頼することになるかもしれません。なるべく軽いテーマでさせて頂きますので、どうぞよろしくお願いします。)

戦後と数え始める日
―日本兵の幽霊は何故現れるのか―

美術家、沖縄国際大学非常勤講師
花城　郁子

二〇〇六~七年、金光教教学研究所の皆様とは研究会を通して交流が始まり、沖縄・神の島久高島でのフィールドワークは印象深いものとなった。御嶽(うたき)(祖先神や神を祀る聖なる場所)を巡りながら私の何気ない一言、「日本兵の幽霊を見るのは日本人で、私たちは米兵の幽霊を見た話は聞かない。同じようにアメリカ人も日本兵の幽霊は見ないのでは?」を覚えていて下さり、「聖ケ丘」の寄稿へと繋げて頂いた。その言葉は私自身が戦没者への共感性について考える機会となった。

父方のお墓には、私の曾祖父と、その兄家族のお骨壺が祖先と一緒に並んでいる。壺中には小石が三つ、親子三人の魂を乗せて入れてあると母から聞いた。沖縄戦で一家全滅となり、最後に見かけたとされる場所の小石を拾い、戦後、民間巫女ユタに魂を込めてもらったのだという。

沖縄では六月二三日は「慰霊の日」として沖縄戦没者を弔う公休日であり、公立学校や県庁、各市町村は休みとなる。私が小学生の頃は「戦争の話を親戚、家族から聞いて作文にしなさい」がこの日の課題となる。祖母に訊くと「うちは疎開したから戦争では亡くなっていない」との返事で、先の「石三つ」のことも語らなかった。当時の作文は、より悲惨な体験を書いたものが評価されるという印象を持ち、私は疎開して助かったことへの罪悪感から、とにかく沖縄戦では無事だった、という表現に苦心した。

その祖母が人生末期の昏睡時に、最後の疎開船に乗る決心、先での苦労、戦後の子育ての辛さを聞き手が居るかのように話し続けた。食材を分けてもらうために頭を下げ、日本語とウチナーグチ(沖縄口、語)で同時通訳のように今は亡きお姑さんに伝える所作が、まるで当時を観ているようであった。戦争では誰も亡くなっていない、苦労は無かったと言った祖母は、最期に戦争のこと、義家族を弔ったことを一週間話し続けて唐旅に出た。「唐旅(トータビ)」とは沖縄語で「死出の旅路」のことをいう。

終戦をどこで迎えたか、何を思ったかはそれぞれ違う。そして戦争が始まったと感じるのも同様で、召集令状が来た時か、疎開時なのか、家族の死を告げられた等々で違うだろう。戦争体験は何一つ誰一

人同じものはない。生きる間に語れなかった体験談は人生の際で発露する。

沖縄では年間約五〇〇発の不発弾が処理され、戦没者遺骨収集も現在進行形だ。地中にある不発弾処理はあと七〇年から一〇〇年かかると予想され、米製爆弾処理には数時間の避難を余儀なくされる。

大学講義で「戦争画」をとりあげるが、沖縄戦を描く作家が県外出身者であることに気づく。地元作家は米軍基地フェンスの向こう側に思いをはせた油絵や戦闘機を高いデザインで表現することはある。沖縄戦経験者が書くのは「体験の説明のための図」に留まる。絵画としての客観性、画題としての地上戦は、心情的に他者化しにくいのだろう。だからこその「間接表現としての沖縄戦」なのか。「絵画としての沖縄戦」を地元作家が描く日は来るのだろうか。

地上戦があったことから、幽霊譚には事欠かない。その話は激戦地、そこが都市開発でレジャー施設に生まれ変わる地域、観光客が賑わう繁華街である。そこで日本兵の幽霊は多くの人の前にその姿を現す。私が子供の頃は、観光名所の那覇市某市場に日本兵幽霊が敬礼をして立っている、との噂を聞いた。その後、幽霊は戦争の虚しさを説いて回っていた、観光客に声をかけ戦争は繰り返してはいけないと諭していた等、バージョンアップしていった。が、声をかけられた人は、その幽霊には気づかずに買い物を続けた、という語りは変わらないままだった。

私の知人の海兵隊員Dは、日本文化に興味を持つ西ユーラシア系アメリカ人。彼が日本兵の幽霊を見たと話してくれた。毎夜2時に目が覚めると、兵舎を多くの人が歩いているのが見える。昔の服を着た、ある者は素足や草履履き、リヤカーをひく人、沖縄の老男女や子どもを連れた女性達が南から北へと行列をなし歩いている。その中に日本兵がいるのだという。二〇代前半の彼が「行列は沖縄戦で逃げている人達」と分かり、その中の数名は、彼に気づき目線を合わせてくるのだと。

別の米軍人が観た日本兵の幽霊は、硫黄島の慰霊祭後に現れた。彼らは米軍司令官の部屋前で直立不動の敬礼をし、別の司令官の部屋では、ドアを開けた途端に行列をなし部屋を通り抜けていった。前者は国や人種、勝ち負けを問わず慰霊祭を行う心が戦没者へ届いたと受けとれるだろう。

何故、日本兵幽霊は国籍や軍階級を問わずに姿を現すのか。見る側の共感性や平和観によるのか、過去の出来事を忘れさせまいと土地の記憶として現れるのか。死後も個性や使命は残るのだろうか。

今も沖縄では、不発弾処理が続き米軍施設もある。その現実だけでなく、私は精神的に戦争が終わっていないと感じる時がある。それは沖縄に祖先行事が多く戦争談を聞き受け伝える場があるからだろうか、または収集遺骨、遺品から戦を始めてはならない、終わってもいないと感じるからなのか。

戦後八〇年、元兵士は終わらない戦いと「時続き」に在り、人生の際、現役のままのその姿で私たちの前に現れる。何故現れるのかはわからないが、私は彼らの軍服と遺骨となった姿を見なくなるその日から、戦後と数えたい。

「聖ヶ丘」第二八号より再掲

連載

徒然なるまま vol.3

我々の求める無謬性って何？

評議員　阪井澄雄

平成九年一〇年の教規改正に先立つ会議で、「無謬性」という言葉が俎上にあがったことがありました。確か、宗教法人法上の、教団の代表役員を「教主」から「教務総長」に変更する理由に関連して出てきたと記憶しています。

宗教団体が刑事や民事の裁判で当事者となる事案が続き、教主金光様に御迷惑をかけることのないようにとの趣旨の提案が、その起こりでした。これから金光教が、教団として積極的に活動するにともなって、「試行錯誤」することが想定される。それを許容するにも、「教務総長」を代表役員として責任主体にするのが望ましいのではないか、といった意見に付随して出てきたのです。

議論の経緯は、この程度の大まかな記憶なのですが、しかしその中でも、「無謬性」の言葉とともに印象に残っているのは、幾つかの書類の提出先が「教主」でなくなることへの不慣れ感が危惧されることや、会議休憩中、当時教学研究所長だった佐藤光俊師の紫煙に包まれた呟きです。「自分たちの信仰にとっては、憲法や宗教法人法より、教規の方が上位なのになあ…」と。

それから十年ほど後、当局で御用することとなり、「教主の御決裁を頂く」意味を身近な感覚で問われるきっかけとなった、一つの出来事に出遭いました。

祭場での祭典時には、「祭典案内」の冊子が発行され、様々な御用に当たる方々の氏名が掲載されます。その際、部署ごとに御用奉仕される方の日程の都合や、その方の在籍教会はじめ関係者との関わりなど、間違いがないか、電話等で確認します。そうして確定した内容をもって、教主の御決裁を頂き、印刷に回します。ところが、ある時、原稿が印刷に回った後で、御用下さる方の関係者から「聞いていない、勝手に運ばれては困る」との電話が本部教庁に入ってきたのです。もとより、教主金光様の教団統理を補佐する教務として、その全きを期すべく手順を追って運びを進め、「これで大丈夫」と判断して御決裁を頂いたわけですから、担当部長は驚きと申し訳なさで顔面蒼白…。すぐさま調べると、事前に確認をとったはずの情報共有が、在籍教会内で行き届いていなかったことが判明しました。そして改めて取り運ぶことになったのですが、かえってそのことで、その方の教会のご家族間にあった、意思疎通の微妙な課題が解消する契機にもなり、お詫びと礼が交わされて、文字通り御決裁のとおり、おかげを蒙らせて頂くことができたのでした。

担当部長とは次のような会話になりました。「教主の御決裁を頂くというのは、お取次ぎを頂くことだから、考えて見れば、その時点の状況に止まるものでなく、先々までを御祈念下さる中で、おかげを蒙って行くということなんだよなあ」、「そうだよね」と。今更言うまでもない事を再確認させてもらっただけのことかもしれませんが、暫し何とも言えない温かさと安堵に包まれて、互いに笑みを交わすことができたのでした。

またそれとは前後しますが、教団会議員を経験された先生が教師在職四〇年の褒賞を辞退なさった件もありました。どういう事情でのことなのか、考えをお訊ねしますと、その先生は、「議員在任の数年間、毎年の通常教団会で次年度の布教計画が審議され、満場一致で予算案を承認してきたのだが、教団状況は改善の様子が見えない。自分として同じことを繰り返すのは許せない思いが強くなり、その年は賛成の挙手をせず、初めて満場一致でない予算案通過となった。だから、そのような御用しか出来ていない自分が教主から褒賞を頂くなど考えられない」と、辞退される胸中を打ち明けられたのです。

教主統理の下で、教団会議員としての“御用に過ちがあってはならない。”その先生は、この思いを抱き、

教団の行く末の結果にまで責めを負い続けておられたのです。私は、かなりの時間をかけてお話を聞かせてもらい、教主の統理事項の一つである褒賞は“褒める”だけでなく“督励”の意味もある旨を繰り返し申し上げ、何とか御承知くださって褒賞を受けて頂くことが出来ました。これも印象深い出来事です。

制度の整合性はもちろん大切なことでしょう。ですが、それ以上に、見ておかねばならないことがあると言えそうです。私たちの信心の世界は、人間と時間を要素とする助かりに大きく関わっています。それゆえ、どれほど整合性を一義とする規程で包(くる)んだとして、信心の世界において、求め、願われる「無謬」というのは、我々の意識の更に深くというか、遥かに上というか、それとは別の相で、助かり立ち行きが生まれてゆくことを、きっと何処かで前提しているに違いないでしょう。であるならば、制度に包もうとしているのは如何なるものであるのか、逆に包まれての制度ではないのか…、そこを見失わないこととしての「無謬性」への視座が大事なのかと思われます。

彙報

（令和六年六月一日～令和七年五月三一日）

▲ 人事関係 ▼

一、職員

○教師濵田裕太郎、一〇月一日付で助手に任命。○所員橋本雄二、一〇月一一日付で辞任。○部長高橋昌之、一〇月三一日で任期満了。翌一一月一日付で再任、第二部長に指名。○部長白石淳平、一二月三一日で任期満了。翌一月一日付で再任、第一部長に指名。○所員塩飽望、一二月三一日付で辞任。○事務長滝口祥雄、三月三一日付で辞任、翌四月一日付で主事に任命。○主事安武格、四月一日付で事務長に任命。

二、研究生

○研究生濵田裕太郎、九月三〇日で委嘱期間満了。

三、研究員

○研究員髙阪有人、同八坂恒徳、一月一九日で委嘱期間満了。○教師井上真之、一月二〇日付で研究員を委嘱。○教師橋本望、四月一日付で研究員を委嘱。

四、評議員

○評議員浅野弓、七月一日で任期満了、翌七月二日付で再任。

※五月三一日現在

所長、部長三名、幹事、所員一名、助手二名、事務長、主事三名（計一二名）、嘱託六名、研究員八名、評議員五名。

☆ おめでた ☆

結婚

○助手森定展開は、六月二九日、髙阪舞さん（三重・伊勢）と結婚。

○元所員橋本雄二と元所員橋本望（旧姓・塩飽）は、一二月一五日、結婚。

出産

○助手森定展開・舞夫妻に、四月一四日、長女かんなちゃん誕生。

SAKAMICHI

今年も通信『聖ヶ丘』を無事に発行させて頂くことができました。所外から玉稿をお寄せ頂きました先生方には、厚く御礼申し上げます。

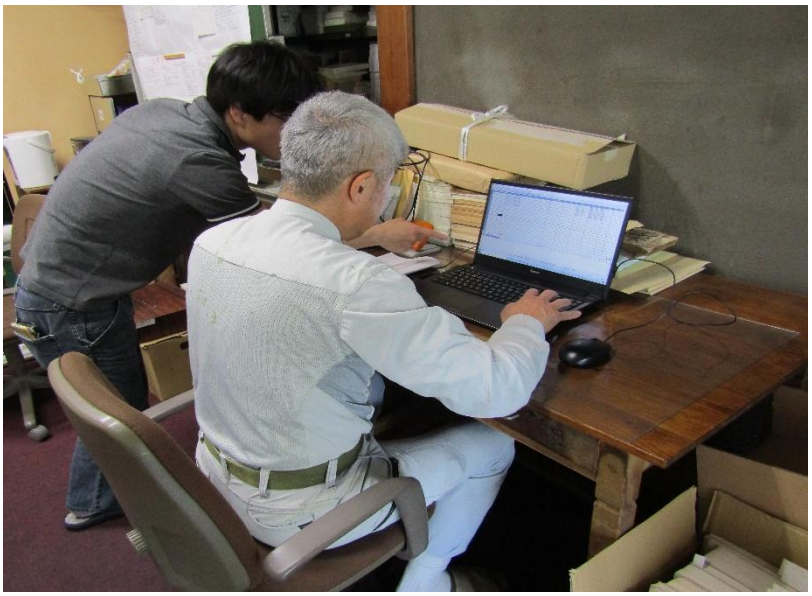
ここまでお読み頂くとお分かりのように、本所は本年度より、教団の「アーカイブズ(文書管理体制)」構築に向けて動き出しました。

昨年の研修旅行で、京都大学の高木博志先生のご案内により、京都大学大学文書館を見学したことも、一つの契機になったと思います。

またこの度、花城郁子さんには、およそ二〇年ぶりに、この「聖ヶ丘」に登場して頂きました。その当時とは、本所の職員も大半が入れ替わっておりますが、これもある意味、アーカイブズの持つ力と言えるでしょう。

このように、アーカイブズには、バックアップやストレージとは違い、資料や情報を資産として活用することが期待されています。しかし、我々も資料や情報の収集に努力はしますが、そこには限界があり、それだけでは足りません。外部からの提供があってこそ、より精度の高いものになるのだと思います。

思えば、私たちが教祖様の信心に触れることが出来るのも、多くの先人たちの手により伝えられてきた資料があってこそと言えます。本教の未来のために、より精度の高いアーカイブズができますよう、皆さんからの資料や情報の提供を、職員一同、心よりお待ちいたしております。また、資料整理を経験してみたいという方、資料整理に興味があるという方も、遠慮なく下に記載の連絡先宛てに、ご一報下さればと思います。㊙



ボランティアによる資料目録入力の様子

発行・印刷　金光教教学研究所
岡山県浅口市金光町大谷１４４１の３
電　話　（０８６５）４２―３１１７
ＦＡＸ　（０８６５）４２―３１１９
Ｅメール　kyogaku.secretary@gmail.com
ホームページ　http://www.konkokyo.or.jp/kyogaku/index.html